銀河捜査官
プリズィーヌ&スカイナ
脅威！淫魔星人インキュバスの
媚薬ザーメン

銀河捜査官ブレイブ☆スカイナ＆プリズィーヌ
私は、銀河捜査官ブレイブ・プリズィーヌ。

銀河系。このとてつもなく広い宇宙には、様々な生命体が存在し、その星々で組織、国家が存在し、秩序があるの。そして、犯罪も然りで――。
この銀河系には、無限に広がる宇宙と同じく、無限に犯罪と陰謀が渦巻いているから、それを取り締まるべく組織されたのが、銀河パトロール隊ブレイブなの。

銀河パトロール隊一年目の私は、セイント族という事もあって、女性でありながら戦闘力に長けており、自分で言うのも何だけど優秀な隊員なのです。
そんな私は、惑星中の女性型異星人を連れさらっている淫魔星人インキュバスの棲家を突き止めて、相棒のスカイナとやって来たのだけど…。

「カーカッカカカカカ！よくぞ、たった一人でここまで辿り着いたもんだなぁ…！　お嬢さん、名を何と言ったかな？」

「銀河捜査官ブレイブ☆プリズィーヌよっ！！！淫魔星人インキュバス！覚悟しなさい！このプリズィーヌが来たからには、これ以上アナタの好きにはさせないわ！」

そう、ここまでの来る途中、いくつかのダンジョントラップによって、相棒のスカイナとはぐれてしまったの。
そして、今まさに、私と一対一で対峙しているのは、この廃墟の神殿を棲家にしている淫魔星人インキュバス！
インキュバスは、淫魔という事もあってか、大きなイチモツを勃起させ、それを自慢するかのような座り方で神殿の玉座にドッシリと座っていたの。

「カカカ…貴様ひとりで何が出来るというのだ！……まぁいい、俺様の力をとくと思い知るがいい！！」

　インキュバスは、そういうと背中の翼を飛行させ、私、目掛けて飛んで来た！そして、私を地面に叩きつけようとする拳を振り落として来たの！

ブワァ！
ヒュン！

　私が素早く身を翻し、宙を舞うとインキュバスの拳は地面を叩き割った！

ズガガガガガガ・・・・！

　空中で私はそれを目にしていると、インキュバスは自慢の大きく反り上がったイチモツをにぎりしめる様子を見せた。

「ヒャッハー！！媚薬ザーメンシャワー！！」

インキュバスはそう言って、イチモツの先から大量の白い液体を、空中で逃げ場のない私めがけて飛ばしてきたの！

ドピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュピュ！！！

　それは、インキュバスが狙っての事なのか分からないけど、その白い液体は見事に私の顔面を捉え、私が地面に着地するまで続いた。
「ンッぐハァ…！　ンンン…！　ううっ……！ンンン…！　ううっ……！！」

　それは、溺れてしまうと思うくらいの攻撃だった。

「げっ…！　ンッぐ…！　ンンン…！　ううっ……！　ンぐン…！　ううっ……！ンッぺっ…」

　着地するなり地面にしゃがみ込んでしまった私は、この白い液体がインキュバスのザーメンだと味覚で確信しながら、全てを吐き出すようにむせ返っていた。

「ハァ……ハァ……なんてトコから……ハァ……なに変な液体だしてるのよ！ハァ……ハァ……それもクチ目掛けてなんて……はぁ…思いっきり飲んじゃったじゃない……よくもあんな下品な攻撃をしてくれたわね……絶対に許さないんだから！」

「俺様の魅力的な攻撃に溺れ死ななかったとは、流石、銀河捜査官ブレイブの隊員だな」

「ハァ……ハァ……魅力的な攻撃ぃ？ハァ……ハァ……あんな攻撃で溺れ死になんて、末代までの恥よ……ハァ……ハァ……」

　あれ？足腰に力が入らない。それに、なんだか体が熱い。

　私は、自分の体の違和感に気づいていたものの、目の前の敵を倒さなければという正義感に燃えていた。
　そのはずだったのだけど……

「ククク…どうした？体が震えてるようだが」

「ハァ……ハァ……なっ何でもない！ハァ……ただ怒りで震えてるだけ！ハァ……」

　あれ？敵を目の前にしてるっていうのに下半身に力が入らない。それに、見たくもないのに、なぜかインキュバスのオチンチンに目が行っちゃう。

「カーカッカカカカカ！どうした？俺様のチンポばかり見てないで早く掛かってきたら、どうだ？」

「オチンチンなんて見てなんかないわっ！」

　やだぁ、どうしちゃったのぉ？私ったら、インキュバスの大きなオチンチンから目が離せなくなっちゃてる……
はぁ……物凄く体が火照ってて来ちゃってるし、オチンチンから目を背けなきゃいけないのに…あのオチンチン見てたら、あそこがジンジンして、アソコの奥が熱くてたまらなくなっちゃう。

「俺様のチンポが気になって仕方がないってんなら…いいんだぜ、パクっっとクチで咥えても♪」

「なっ何言ってるのよ！そんな大きいの、クチに入るワケないでしょ！

　……ヤダ！クチに入るとか入らないとかじゃなくて、なんでアンタの、その汚いオチンチンをクチに入れるのよ！」

　あ〜ん、ダメなのにィ〜、あのオチンチン見たら、生理前の性欲に、囚われたみたいに、どんどんアソコがウズウズしてきちゃう。
　早くコイツを倒して、帰ってオナニーしたい。・・・やだ、私ったら、こんな時にナニ考えてるの？

「それじゃあ、こっちから仕掛けてやるよ！」

　インキュバスはそう言って、私に逃げる隙を与えることなく、私の背後を取った。

　そして、私のオッパイをむんずと揉みしだくように、握りしめて来た！

「カーカッカカカカカ！どうだ！このオッパイもみしだき攻撃は！」

「ハァ……触らないで！気持ち悪い！放しなさい！」

　私がインキュバスの両腕を跳ね除けようといたものの、力が入らず――。その代わりに、私の乳房は性的な感覚にスイッチが入ってしまったようで、普段は強靭な皮膚に覆われているセイント族の胸の先端が赤らみ始めていたの。
　それは、性的な興奮を得た時にしか現れることのない女性特有の乳首に膨らんでいった。

　私はオッパイの先端を晒す辱めを受けながらも、必死に抵抗を試みたのだけど、ふしだらな感覚に全身が包まれてしまい、より一層チカラが入らなかった。

「ハァ……いや！放しなさい！触らないで！ハァ……放しなさいったら！」

「ウッヒョ～♪超特大マシュマロ、おっぱい柔らけぇ～♪」

　インキュバスはそう言いながら、私のオッパイの弾力を楽しむかのような手つきで、これみようがしに弄んでいた。

「ハァン……！　やめなさいよ！その汚い手で触らないでよ！気持ち悪い！」

　私は、インキュバスがこねくり回す乳首に思わず感じてしまったけれど、どうにか強がるセリフを吐き出した。

「カーカッカカカカカ！こんなに乳首ビンビンにさせて何を言ってやがる！これが気持ちいいんだろ？」

「ハァ……乳首さわらないで！そんなイヤらしい触り方しないで！・・・ひっぱらないでったら！」

　インキュバスが私の乳首を摘まみ上げた瞬間、私はインキュバスに反撃する攻撃も言い返すことも出来ずに、ただ喘ぎ声を漏らす事を我慢するとしか出来なかった。

　それだけ、インキュバスの指は私の乳首から全身に快感を走らせ、自分でも嘘をつけないぐらいに乳首が勃起していることがわかった。

「ハァン……！　いやぁ！乳首い！だめぇ！お願い！これ以上は、触らないで！」

　ようやくインキュバスに差し向けた言葉は、嫌悪に満ちたものではなく、これ以上、触られたらどうにかなってしまいそうになるから、やめて欲しいという気持ちでしかなかった。

　やだ…　乳首が生理前みたいに、どうしようもなく、こねくり回したいくらいに勃起しちゃってる…

「ほぉ〜ら♪乳首をこんな風にグリグリされるのが気持ちよくて、タマらないんだろぉ？」

　インキュバスは、私がこうされれば、よがってしまうのを分かってるかのように、私の乳首を弄んでくる。

「ハァ……アンタの触り方なんかじゃあ、私…　感じたりしないんだからね……」

　コイツに触られるの、嫌なのに……オッパイ……すっごい感じちゃってる……

「ハァ……触らないでぇ！もう離しなさいったら！！いいいかげんにしなさいよね！」

「おいおい、オッパイちゃん、どこ行くんだよぉ～？」

「ハァ……もう、いい加減にしなさいったら！」

　私は、自分の使命感を取り戻すべく、背後からオッパイをもみしだいているインキュバスの手を引きはなすように、クルっと身体を一八〇度回転させた。

　だけど、インキュバスと対面するような形になってしまい、今度は勃起した乳首をインキュバスの胸板に押し付けるような格好になってしまった。

「！！！・・・お前の乳首、こんなに飛び上がって喜んでるって言うのによぉ～♪なに痩せ我慢してんだよぉ！」

「感じてなんかないわ！離しなさいよぉ！！感じてなんかないわよ！感じてなんかないんだから！！離しなさいったらぁ！！」

「素直になりやがれよ！お前の身体は、俺様に気持ち良くして欲しくて仕方ないんだろぉ～？」

「オッパイの弾力ぅううう！体全体で感じられるぜぇ！」

「ハァ……いやぁ！！鼻息、気持ち悪い！！顔、近づけないで！来ないでったらぁ！！」

　ふいに気がつくと、インキュバスの大きく反り上がったオチンチンが私の股に挟まっていた。

「ハァ……ちょっとぉ！！何、変なモノ押し付けてるのよ！」

　私はインキュバスのオチンチンにまたがるような形になった事で、その肉棒の弾力と熱さを感じながらも、同時に自分の股下に何か異変がある事に気がついた。

　なに？このヌルヌルして気持ち悪い感覚は？

　一瞬、私の股に擦り付けているインキュバスのオチンチンがヌルヌルの原因かと思ったのだけど――。それは、そうではなかった。
　ヌルヌルした感覚の原因は、私の股の間からだった。
　本来、胸の乳首同様に性的な快感が無い限り、セイント族の恥部は強靭な皮膚に覆われているものなのだけれど――。私の股の間は、いつの間にか女性特有のワレメを浮き彫りにして、快楽を開花させようとしているかのように、イヤらしい蜜を溢れさせていたの。
　どうやら、インキュバスに勃起乳首をこねくり回され、私のオマンコが愛液を溢れさせてしまっているみたい。
　それに付け加えて、インキュバスが擦り続けているオチンチンが、ちょうど私

のクリトリスに程よい刺激を与えているようだった。

「ハァ……お股で、オチンチン、すりすりしないでよぉ！！いやぁ！！気持ち悪い！」

「ひゃん！」

　突然、インキュバスが私の乳首をブニブニした唇で吸ってきた。

「ママぁ～おっぱい出ないでちゅかぁ～？」

「ハァ……いや！やめてぇ！おっぱいなんて出ないわよ！乳首い！吸わないで！シタでコロコロしないでったら！」

　もうエッチなスイッチ入っちゃうからぁ～！！

「いや・・・触らないでぇ・・・」

「こんなに乳首ビンビンになってるって事はさて下はどうなってるかなぁ？」

　そう言ってインキュバスは、私の知られて欲しくない事情を、股の間に手を突っ込んで、その事実を知る事となる。

「おー！おー！もうこんなにグッチョリだったとはなぁ～♪」

「ハァ……濡れてなんかないわよ！アンタの指の汗なんじゃないの！ハァ……パンツの中で指を動かさないでったら！」

「こっちも方もさぞかし触って欲しくて仕方なかったようだな♪」

「カーカッカカカカカ！ほら自分でもよく見てみろよ！マン汁が溢れ出てきてんぞ♪」

　インキュバスは、私の股座から手を出し、私の目の前に私の愛液が絡み付いた指先を、見せつけてくる。

「はぁ？・・・濡れてなんてないったら！」

　とっさに私は自分の痴態を隠すようにインキュバスの指を握りしめたけど、その愛液の生温かい感触と淫靡な匂いに、はしたない自分を思い知らされた。

「……これ私のじゃない！アンタのヨダレでしょ！」

「カーカッカカカカカ！マンコから、こんなにイヤらしい匂いをさせておいてよく言うぜぇ～！　それにクリトリスも勃起させてるの分かってるんだぜ♪」

　そう言って、インキュバスは再び私の股の間に手を滑り込ませて、クリトリスの筋張ったところに指をやってきた。

　そして、愛駅が溢れ出ているオマンコの割れ目に指をやって、それを絡めとると、勃起クリトリスに塗りたくるように、撫で回して来た。

「はぁん！！」

　思わず喘ぎ声を漏らしてしまった私は立っていられるのが精一杯で、インキュバスを突き飛ばす力が出てこないでいると――。

インキュバスは私の両足を抱えて、私の体を宙に浮かし、ぐるりと、そのまま地面に私を転がした。

「きゃあっ！！」

　インキュバスによって、地面に背をつけさせられた私の格好は――。脚は大きく開脚し、背を丸めた形で、私に自分のオマンコの匂いを嗅がせるかのようなマングリ返しのポーズを取らされていた。

「ハァ……いやぁ！こんな格好っ！なにする気？」

　自分の目の前で、クリトリスが勃起した陰部を露わにさせられた私は、身動きが取れず、あられもない格好のまま、危機感を感じていると、インキュバスはその勢いのまま、ヨダレを垂らしまくっている舌で私のオマンコを舐め始めた。

「はぎゅうううううううう！ハァ……いや！いや！いや！……ハァ……そんなトコ、舐めないでぇ！ハァ……いや！舐めないでぇ！ハァ……舐めないでったらぇ！」

　抵抗する言葉よりも先に、喘ぎ声を出してしまった私だったのだけれど――。どうにか、インキュバスに対して嫌悪する感情を振り絞った。

「ハァ……いやぁ！ハァ……！いやハァ……！いやハァ……！ハァ……ハァ……舐めないでったらぇ！気持ち悪い！ハァ……！ダメ！ハァ……！ダメ！ダメ！ダメ！」

　インキュバスは私の言葉に耳を傾けず、より一層、舌を動かして私のクリトリスをほじくり返すように舐めたり、オマンコの割れ目にそって舌を這わせたりし

て、私は自分の言葉とは裏腹に無抵抗に感じてしまっていた。

「ハァ……！ダメ！ハァ……！ダメ！ダメ！ダメ！ハァ……！ダメ！ハァ……！ダメ！ダメ！ダメ！ハァ……！ダメ！ハァ……！ダメ！ダメ！ダメ！」

　嫌悪する言葉を吐き出しながらも、私の身体は時折ビクンと痙攣させながら、インキュバスのクンニ・テクニックによって、オマンコから愛液が溢れ出しており――。インキュバスのヨダレと共に、それがイヤらしい匂いをさせながら私の身体に流れてきた。

「マン汁が溢れてキリがないようだな！イッキに気持ちよくさせてやるよ♪」

　そう言って、インキュバスはズボリと私の膣口に二本の指を入れてきた。

「んぐふっ！！」

　私は、その指の硬さと気持ち良さに脚を振るわせて感じてしまった。

「奥の方がもっと感じるんだろ？」

「ハァ……そんなトコに指を入れないで……」

　膣の肉壁に割り込んでくるインキュバスの指に感じながらも、銀河捜査官ブレイブとしてのプライドが、その言葉をかろじて出て来た。

「ハァ……指を動かさないで！ダメ！ダメ！ダメ！ハァ……！グリグリしないで！ダメ！ダメ！ダメ！ハァ……」

しかし、膣の肉壁はそれを歓迎するように愛液を溢れさせていて、インキュバスの指を私の一番感じるＧスポットへと滑り込んでいった。

「ハァ……いや！そこはダメ！」

私の反応に何かを感じたのか、インキュバスは私のＧスポットだと思われる箇所で一点集中に指を激しく動かし始めた。

グチュグチョグチュグチョグチュグチョグチュグチョ・・・
「ダメダメダメダメダメダメ・・・！！！」

私は快楽の絶頂に誘われるように、頭の中が真っ白になって行くのを感じながら、同じ言葉を連呼するしか出来なかった。

グチュグチョグチュグチョグチュグチョグチュグチョ・・・
「ダメダメダメダメダメダメ・・・なんか出ちゃう！」

ぷしゅあああああああああああああ

その瞬間。私が目の当たりにしたのはオシッコのようだったけど、普段しているオシッコとは別物で――。それには快感という名の性的な感情が混ざっており、私の尿道から放出されたソレは、私の体の中でトドめておく事が出来なかった気持ち良さを表現させていた。
これが、俗にいう潮吹きという物なのかな？と、思考が戻ってきた私だったけれど、全身がガクガク震えて、私のオマンコはピクピク痙攣していた。

マングリ返しの格好で潮吹きをしたせいで、自分の顔に多少オシッコが掛かったものの、それは無味無臭でやはりオシッコではないのかな？などと放心状態の

頭でそんな事を考えていると、インキュバスが次の行動に出て来た。

「カーカッカカカカカ！気持ちよかったかよ！それじゃあ、今度は、オレのも気持ちよくさせてもらおうか」

　そう言って、インキュバスは快楽を開放した大股開きの、私のオマンコに、イキリ立つ男性器の肉棒を押し付けてきた。

「いやぁ！そんなの入れないでぇえええええ！！！」

　本当に嫌だった。心の底から私は嫌悪感を露わにしたが、私の体はそうではなかった。

「ほら見てみろよ！お前のマンコは、美味しそうにオレのチンポを飲み込んでるぜ♪」

　インキュバスの言葉の言う通り、私のオマンコはインキュバスの亀頭を丸呑みにして、尚も太くて長い竿を愛液というヨダレを絡ませながら頬張っていった。

　そして、私の嫌悪感はインキュバスの肉棒を飲み込むと同時に、快感へと変化していき、オマンコの奥にある子宮にインキュバスの亀頭が届いた頃には、私自身インキュバスに対して嫌悪する言葉さえ発する事が出来ないでいた。

「うぐ・・・！」

「お前のマンコ、すげえよ！オレのザーメンを欲しがってるみたいに膣が搾りあげてくるじゃねぇか！」

「ハァ……そんなことないハァ……うそよ！ウソ！ウソ！そんなのウソよ！」

　私も分かっていた。自分でも、分かるぐらいに膣が男性器を貪るように締め付けている事が。
そして、インキュバスの肉棒が上下に動くたびに膣壁から全身に快楽を走らせ、インキュバスの亀頭が子宮にぶつかるたびに、女としての悦びに体が震えるのを感じていた。

「そんなに激しく突かないで・・・！！！」

　ハァ……オチンチンの先が子宮に当たって……頭のテッペンまで響いてくるぅ
　いやぁ……　また何か来ちゃう。ハァ……やだぁ……なにコレ……
　インキュバスの亀頭が大きく膨らんでるみたい。もしかして、このまま射精されちゃう！

　私の頭にソレがよぎった瞬間、理性を持った人間の感情を思い出させた。

「ダメダメダメダメダメダメダメ……！！！このままだお赤ちゃん、デキちゃうぅううううう！！！」

　その私の嫌がる声に、興奮を覚えたかのようなインキュバスは、今までよりも、さらに激しく腰を動かして、私の下半身を性処理道具として扱うように、尊厳なく私を犯していく。

「うっひょーーー！！気持ちいい！！出すぞぉおおおお！！！！」

　その言葉と同時に、私の下腹部にある子宮は、今まで味わった事ない快楽と熱

いモノを注がれる違和感を感じながらも受けいれる事しか出来なかった。
　その反面、私はその感情を声にした。

「いやあああああああぁあああああああ！！！」

ドピュ！！！

「いっ！いやぁ！ダメッ！やめてぇ！！中に出さないでぇ！！妊娠しちゃう！
赤ちゃんデキちゃうっ！！あぁ熱い！アソコが熱いぃ
汚いのぉ！子宮にかけられてる！どぴゅどぴゅ出て……中に入ってきてる……」

　インキュバスが精子を絞り出した肉棒を、私のオマンコから抜き取ると、それを追いかけるように、今まで見た事のない白い液体が溢れ出てきた。

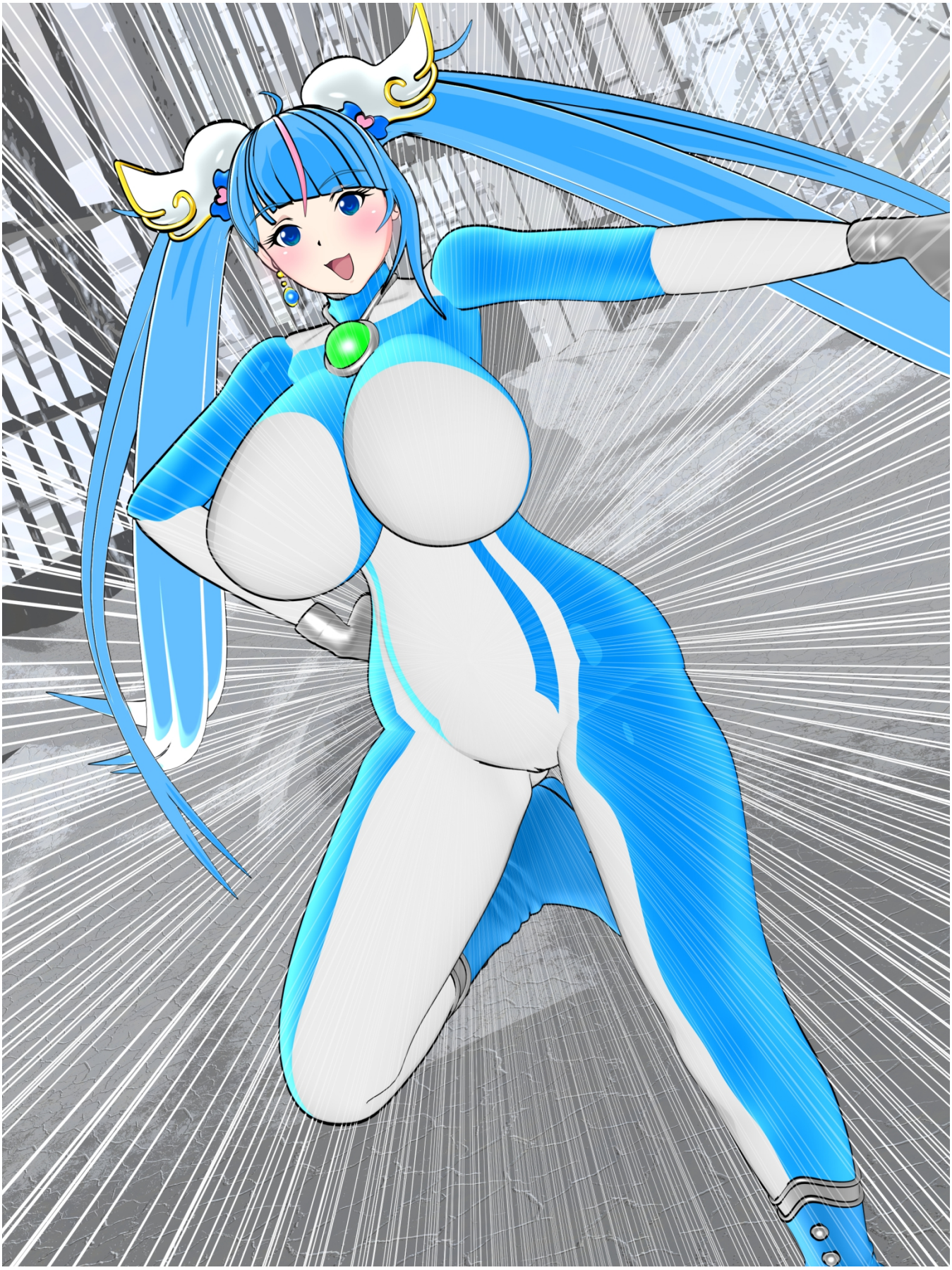
　私のオマンコから溢れだて来たインキュバスのザーメンは、私の子宮に入りきらなかった精子とはいえ、それは、あまり多く…私の子宮がインキュバスの精子をたっぷりと飲み込んでいる事を実感させた。

「いやあああああああああぁぁあああああ！！！！！」

「ぬっん！？」

　自分のザーメンが溢れ出る私のオマンコを楽しんでいたインキュバスだったのだけれど、ふいに何かに気づいた様子を見せた。
すると、私にも分かるぐらいの怒号が、こちらに向かって来ていた。

「キッッサマァアアアアアアアアアア！！！！」



ズドドドドドドドドド・・・・！ブン！ブン！ブン！ブン！ブン！

「でやぁ！！」

　その怒号と共に、怒りの拳を振り回しながら走り込んできたその人は、インキュバス目掛けて、その拳を振り落とした。

ドゴォオオオオオオ！！！！

　インキュバスが素早く宙に飛来すると入れ替わるように――。そこには、私の身の覚えのある姿があったの。

　その人は、青い髪をツインテールにした私の相棒で、私と同じくセイント族で銀河捜査官なのです。

「お前は・・・！」

「銀河捜査官ブレイブ☆スカイナ参上！！！」

　高らかに名乗りを上げたスカイナは、すぐさま私のもとに駆け寄って来た。

「プリズィーヌ！大丈夫？」

「スカイナ・・・どうしよう・・・私・・・あのバケモノに中出しされちゃった・・・」

　私は相棒のスカイナの顔を見て、なんだか安心してしまったのか涙が溢れて来ていた。
そんな様子を察してか――。スカイナは、インキュバスに向かって私の代わりに

怒りの表情を見せた。

「きぃ・・・貴様ぁ～！絶対に許さない！」

「ククク・・・今度は、お前が俺様と戦うのもいいが、それよりも先にプリズィーヌのマンコから溢れ出ている俺様のザーメンを早く掻き出してやらないと妊娠しちゃうんじゃないかな？」

「はっ！そうだったわ！ここは怒りを抑えて、今やるべき事があったわ！」

「インキュバス！ちょっと待ってなさい！」

　スカイナは敵を目の前にしているにも関わらず、インキュバスに背を向けて、私が座り込んでいる所へ膝を下ろした。

「ククク・・・レズビアンショーの始まりだな」

　インキュバスの、そんな言葉をかすかに耳をしながら――。この時、私には理解できていなかった。

「プリズィーヌ・・・ちょっとだけ我慢して・・・いま汚いモノ、掻き出してあげる」

　スカイナはそう言って、M字開脚に開いた股から見える私のオマンコに、躊躇なく指を入れて来た。

「はぁ……　ス、スカイナ…！」